

## 課題研究ハンドブック Chapter 2 (試作版)

### ～リサーチのテーマおよびアウトライン～

#### リサーチ／レポートのテーマについて

Chapter 1 をお読みになればお気づきでしょうが、皆さんにとって最初の難問は「テーマを決める」ことです。適切なテーマが決まれば、そこでリサーチの枠組みも一応できてしまいます（もちろん、フィールドワーク等で現地に入れば、頭の中で考えた仮説等、どこかにふっとんでしまうことも、しばしばです＝それもリサーチの醍醐味です）。それでは、テーマを深めるにはどうすればよいか？ 『基礎演習ハンドブック』（関西学院大学総合政策学部、2012）等を参考に紹介しましょう。

#### テーマの深め方 1 課題を論じる際の階層性：どの視点・レベルでリサーチするか？

まず、一つのテーマをとりあげる際、いくつもの視点から問題設定できることを覚えて下さい。

例えば、あなたが「**脳死とそれを前提にした臓器移植**」に関心がある、とします。このテーマをどんな視点・レベルから論じることができるでしょうか？ 以下、住正明（1993）にならって、自然科学から哲学・価値観のレベルまでどんな問題設定が可能か、考えてみます。

レベル1（**自然科学**）：生物学では「死はどんなメカニズムか？」を厳密に論じるかもしれません。

レベル2（**応用科学**）：医学・保健学では「脳死をどう定義するのか？」、「脳死状態の臓器をどうやったら支障なく移植できるのか？」等を論じるかもしれません。

レベル3（**社会科学**）：法学では「法的には脳死をどう定義するか？」、経済政策では「移植手術にともなう高額な医療費をどのように保障するか？」、医療政策では「臓器移植ネットワークをどのように構築するか？」等かもしれません。

レベル4（**人文科学**）：哲学・倫理学・宗教学等では「脳死に関する医療倫理は？」、「その社会は脳死を受け入れるのか？」「死生観は変わるべきか？」等を考察するかもしれません。

このように同じテーマでも、どのレベルをベースにリサーチするかで、議論も変わるかもしれません。もちろん、自然・応用科学のレベルを無視して、社会・人文科学的視点だけで議論することは許されません。また、その逆も同じです。他のレベルも十二分に意識し、複層的な視点でテーマを見直すことであらためて課題の奥深さや難しさを知り、リサーチに重みを加えることが大切です。

#### テーマの深め方 2 一つのテーマをめぐる4つの要因

もう一つのテーマの深め方も紹介しましょう。ノーベル賞受賞者N・ティバーゲンは、行動生態学の分野において、一つのテーマについて研究方針を定める際、**近接（至近）要因**、**発達**、**機能**、**進化（究極要因）**の4つを意識する必要があると指摘しました（マーティン&ベイトソン、1990）。

もちろん、この考え方は社会科学でも応用できます。例として、Chapter 1 で少し触れた**共通語**（リンガ・フランカ）をとりあげましょう。こうした共通語には東アフリカのスワヒリ語等のように、複数の文化が影響、融合してできた言語が珍しくありません。この場合は以下のように整理できます。

**近接（至近）要因**<sup>註</sup>：母語（民族語）が異なる人たちでも、互いにコミュニケーションできる。

**発達**：(かつては)異民族間の交渉の場で身に付けたが、現在は学校制度や放送等で普及している。

**機能**：共通語によるコミュニケーションで**多民族国家**を形成、**学校教育制度**を維持している。

**進化**：異なる民族が接触するうち、複数の言葉が混じり合い、共通語が成立した経緯を考察する。

## 高校生が学ぶ課題研究

こちらでも、ご自分の関心がどのレベルなのか、そして、他のレベルではどんな問題設定が可能か、意識することでリサーチの質を深めることができます。例えば、①スワヒリ語でのコミュニケーションの実態、②スワヒリ語を学ぶ経緯（学校教育）、③スワヒリ語がタンザニアという多民族国家で果たす機能（言語政策）、最後に④どのような歴史的経緯によってスワヒリ語が形成されたか、です。

注：近接（至近）要因とは英語の proximate factor を訳したのですが、訳語ではイメージがわかりにくいかもしれません。ある現象が発生した時に、その現象を直接引き起こすメカニズム等をさします。

### テーマの深め方3—他の方との意見をまとめる＝K J法

さて、リサーチではグループ作業が珍しくありません。そこで肝心なのは、一つの事実を見たとしても、人によって視点も異なれば、評価も異なるということです。当然、あなたとは違う意見が出てきます。そんな時、議論の整理に便利なスキルの一つがK J法です。

図3は、ある地下街を対象とした予備調査から、重点項目抽出のために作成されました（水野、1978）。まず、予備調査で気付いたことを、1テーマ1枚のカードに書き出します。そのカードを磁石等で黒板等に貼りつけ、共通性と相違性を目安に並び替えていきます。すると、カードが自然に系統・整理され、問題点の構造が浮かび上がり、リサーチの全体像がまとまります。これが企業でもよく用いられているK J法の基本です。肝心なのはこうした手法を使い、多様な意見や資料をまとめ、一つのリサーチやレポートにまとめていくことです。

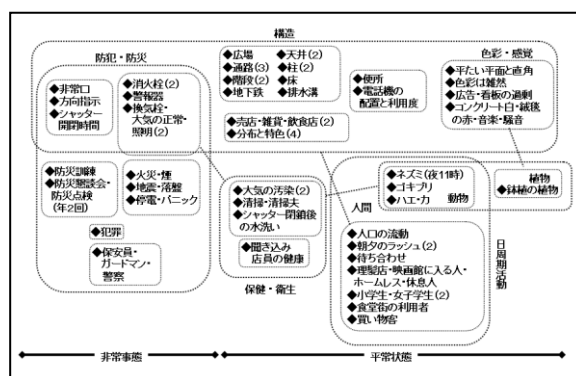


図3. 予備調査で気付いた課題を整理（水野、1978）

### テーマの深め方：失敗をおそれず、オリジナルなテーマを！

最後に、Chapter1でも触れたことですが、ここで再び、リサーチでの失敗を恐れて「ごく平凡なテーマ」、あるいは「最初から結論が決まっているようなテーマ」は避けて下さい。

どなたも手がけていないテーマ、そして手がけているうちに、初めの構想からは「失敗」かもしれないが、その失敗の結果として新事実が見つかるようなテーマへのチャレンジが大事です。先生方にも、そのようにご指導していただければと思います。

### テーマを絞り込む

課題研究で多くの方が陥る“罣”は、テーマをなかなか絞りきれないことかもしれません。そこで、参考例として、高校生の方がSNSを通じて大学の先生にテーマについて相談した実際のやりとりを再録してみましょう。なによりも、一つのテーマについてどんな視点からリサーチするか、先生方からのコメントに注目して下さい（なお、原文を一部修正・編集してあります）。

私は夏のオーストラリア・キャンベラでのフィールドワークで、「遺伝子組み換え作物」に興味を持ちました。

現在、世界では不適切な灌漑農耕等で作物が育たなくなり、その結果、貧困・飢餓が生じています。そこで私は遺伝子組み換え作物を用いて、貧困・飢餓を改善できないかと考えました。また、全ての灌漑農地ではなく、灌漑農業により発生した「塩害」に絞りたいと思っています。それで、「遺伝子組み換え作物(耐塩性作物)で塩害地域での貧困を解決できるのか」というのが、今、私が考えている漠然としたテーマです。

ところが、多くの本やサイト等で、遺伝子組み換え作物は否定されているのが現状です（今日の農業の経済システムによって貧富の差が拡大する、企業の利益にしかならない、等が主に挙げられています）。レポートを書くにあたって、私は農業の経済システムから始めると、肝心の「塩害地域での遺伝子組み換え作物の活躍の可能性」について書けないのでは？ と思い始めました。しかし、遺伝子組み換え作物を貧困地域に浸透させるためにはとても重要なパーツでもあり、レポートの内容や構成にとっても苦戦しています。

どのようにリサーチして、どんな内容・構成をとれば良いか、アドバイスを頂けたらなと思っています。

すると、国際公務員出身の先生が、以下のコメントを返されました。

もう少し因果関係を整理して下さい。例えば、

1. 貧困飢餓の原因は？ 途上国を対象にしていますか？ それとも産業国の国内生産性ですか？
2. 貧困地域の自助努力と貧困緩和に関する技術移転との関連は？ ハイテクの遺伝子組み替えは、Policyの一部ですが、産業国の国内政策には効果があるとしても、途上国との関係ではどうなるのか？ 途上国がそれに過度に依存し過ぎたらどうなるのでしょうか？
3. 農業の生産性向上に関して、遺伝子組み替えはOne of Themです。その他のOptionは？
4. UN/FAO 関連のWEBをもう一度、熟読して下さい。特にMDGs・SDGsの取り組みは大事です。食料運搬過程で20%以上のロスがあることを知っていますか？

**テーマを整理する！** 実は、学会等では、若手からの発表に「そのテーマは範囲が広過ぎ！ 絞る必要がある」、「絞れば、問題点が整理され、自分の関心がはっきりする」、「もう少し別の視点もあるよ！」等のアドバイスをよく耳にします。これらのコメントを考慮しながら遺伝子組み換え作物を扱えば、リサーチの**深みが増します**。次は、別の先生からのコメントです。

塩害農地への遺伝子組み換え作物での対処というテーマは興味深いものです。ただし、現在の日本では遺伝子組み換え作物に否定的な見方が強いことはお書きの通りです。(略) 其上、遺伝子組み換え農作物をめぐるのは、①作物の管理(自生や交雑による遺伝子汚染や生物多様性等に対する影響等)、②安全性の問題(食品自体の安全性と、特定の害虫を殺す事等による影響等)、③企業が遺伝子組み換え技術等で作物を独占して、農家や食料生産を支配する可能性等、とても複雑な議論があります。これらの複雑な問題のどこに重点をおくか？そこをまず決めるのがポイントです。

農水省のHP等をお調べになっっていますか？ 国レベルの議論を知ることがまず大事です。(略) その上で、レポートをどんな形で構想するか？ 可能性として、(1)～(4)をあげますが、御参考にできれば幸いです。

- (1) 人が直接口にする食品作物以外で導入
  - ①塩害農地の再利用に、耐塩性ユーカリ等によるバイオマスエネルギー、紙パルプ利用等を考える。
  - ②ワタ等の工業原料等の作物を考える。
  - ③飼料用のトウモロコシ等、家畜動物の飼料として利用する作物を考える。
- (2) 塩害対策として、土壌から塩を吸収するような植物を遺伝子組み換えで開発する。
  - ①その植物で除塩する(作物としては利用しない)。
  - ②除塩後に、その土地で再び塩害が起こらないような、新しい農業技術(点滴灌漑等)を導入する。
- (3) むしろ正面から、遺伝子組み換え技術利用を全面に打ち出す。
  - ①安全性が証明されたならば、どんどん耐塩性の新品種を導入することを奨める。
  - ②その場合、企業による農業支配が広がらないような政策的対策を考えた方がよい。
- (4) 遺伝子組み換え技術ではなく、従来型の品種改良による耐塩性農作物の品種改良、あるいは海浜部等での植物を調べて、作物として利用可能な品種を探る(これが従来型の育種技術です)。

こうして自分自身が最終的に何を知りたい／訴えたいのか、テーマがはっきりしたら、あらためてタイトルを考えます。必要ならサブタイトルも加えて「アフリカの飢餓を救う～遺伝子組み換え作物による塩害農地の地力回復～」等とします。なお、タイトルはそれだけで内容がイメージできるように工夫して下さい。一方で、たんに物珍しいだけで、他人に何も伝わらないタイトルは避けて下さい。

## リサーチのアウトラインを考える

テーマが決まれば、リサーチの**アウトライン**を想定します。このアウトラインはそのままレポートの構成ともなります。以下は、もう一人の高校生の方へ、アウトラインをアドバイスした例です。

現在、私が興味を持っているのは、日本(特にJICA)が行っているケニアへのボトムアップの支援です。今考えている論文の構成は、

- 1.ケニアの現状
- 2.ケニアで今何が起きているのか？(とくに貧困面について)
- 3.なぜそのような現状なのか？

(次頁に続く)

## 高校生が学ぶ課題研究

- 4.日本がしている支援（ボトムアップ）は？
- 5.その支援は役立っているのか？（役立っているとは、現地の人々がちゃんと支援物資の使い方を知っていて、有効にその支援物資等を使っているかという意味）
- 6.現地がしていることは？ 有機農法等←ボトムアップ（他国からの支援以外に現地の人たちがどのようなことをしているかという意味）
- 7.有機農法はどのような役割なのか？
- 8.有機農法をするのはどのようないい点があるのか？
- 9.解決策

私はこの構成をフィールドトリップ先で聞いたお話をベースとして構成しました。ここで、私が皆さんに教えていただきたい内容は、

- 1.この構成について、どのようにしたらもっと内容も含め絞り込んでいけるのか、またこれで良いのか？
- 2.論文を作成する上で、自分のボトムアップの定義を示した方がよいのか？ またどのような事を定義すればよいのか？
- 3.学校の図書館で本等を調べているのですが、なにか先生がお知りになられていることや、これに対しての先生方の意見やアドバイス、また参考になるような文献を教えてください。

私も JICA の派遣専門家を2年努めました。アフリカの現地の問題は複雑です。それを扱うには、ご自分の考え方をまず整理することが必要です。そのためにリサーチ・レポートの構成を考えましょう。（略）

いただいた内容を（序・内容・考察という）リサーチ・レポートの枠組みに当てはめると、以下のようになるかもしれません（下線部があなたの構成に含まれていたパーツです）。

- I. 序：テーマとその重要性の説明
  - I-1. 主なテーマ：日本（特に JICA）が実施しているケニアへのボトムアップ支援であることを説明
  - I-2. 「ボトムアップ支援とは何か？」を説明
  - I-3. そして「自分はどんな視点から、ボトムアップ支援をリサーチのテーマに選んだのか？」を説明
- II. リサーチの対象の紹介
  - II-1. ケニアの紹介（ケニアの現状を説明）
  - II-2. フィールドトリップ先での体験や、有機農法に関するボトムアップ支援を説明
- III. リサーチの結果
  - III-1. ケニアの全般的な状態を説明
    - ・ケニアで今何が起きているのか（貧困面について）
    - ・なぜそのような現状なのか
  - III-2. 現地での有機農法の現状
    - ・現地の人たちがどのようなことをしているか？ 有機農法等について説明
  - III-3. ボトムアップ支援を紹介
    - ・日本がおこなっているボトムアップ支援
    - ・その支援は役立っているのか？ 現地の人々がちゃんと支援物資の使い方を知って、有効にその支援物資等を使っているか？
- IV. 議論
  - IV-1. アフリカで有機農法がこれから果たすべき役割、将来性
    - ・有機農法を実施すると、どんな良い点があるのか？
    - ・有機農法は今後アフリカの発展にどんな役割を果たすのか？
  - IV-2. 私自身の提案
    - ・解決策

なお、現在、マダガスカルでは伝統的農法から発展させた SRI 農法と、日本の伝統農法を活かした PAPRiz 農法等が展開しているそうです。詳しいことは以下の web をお読み下さい。

- ・ [http://www.madacom.org/conference/summary/conf19\\_02.html](http://www.madacom.org/conference/summary/conf19_02.html)
- ・ [http://www.madacom.org/conference/summary/conf19\\_03.html](http://www.madacom.org/conference/summary/conf19_03.html)

このコメントの骨子は、“**序**”をつけ加えた上で、“**対象**”、“**結果**”、“**考察**”を仕分けしたことです。とくに、“序”では「テーマを絞る＝明確化する」ことが重要です。それはレポートの読者に対しては「これがテーマです」というアピールですが、同時に、筆者＝自分自身にとっては「これが絞り込んだ本当のテーマなのだ」と自覚することです。こうしておのずとアウトラインができあがります。

## 引用文献

- 関西学院大学総合政策学部編（2012）『基礎演習ハンドブック』関西学院大学出版会。  
マーティン・P&P・バイトソン（1990）『行動研究入門』（粕谷英一他訳）東海大学出版会。  
水野寿彦編（1978）『動物生態の観察と研究』東海大学出版会。  
住明正（1993）『地球の気候はどう決まるのか？』岩波書店。

2016年12月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部